

木のぬくもりが育む 新しい学びのかたち

県立春日井高等学校 木造新校舎

県立春日井高等学校では、2025年春に木造の新校舎が完成しました。（詳細は122ページ）

佐野校長と新校舎でホームルームを行う生徒たちに、木造校舎の魅力についてお話を伺いました。



校長先生が語る、木造校舎の魅力

「正直「これは学校なのか」と思いました」と、春日井高等学校の佐野校長は2024年度の着任時を振り返ります。設計図を初めて見たときも、完成した校舎を目にしたときも、従来の学校のイメージを大きく覆す木造校舎に、強い驚きと印象を受けたといいます。

新校舎の教室は窓が多く、明るく開放的な空間が広がっています。教壇に立つ教員からは「教室が木材により明るくなったことで、授業の雰囲気も自然と明るくなった」との声が複数寄せられており、木のぬもりが生徒の精神的な安定にもつながっているのではと、期待が寄せられています。

新校舎に使用されている木材の約65％は愛知県産です。佐野校長は、「地域産材を使うことは、県の林業を支える取組になるだけでなく、CO₂削減にもつながると考えています。教育の場としてだけでなく、持続可能な社会づくりにも貢献できる校舎であることを、生徒たちに伝えていきたい」と語ります。木造校

舎は、環境教育への関心を高めるツールとしても活用されています。

佐野校長は、「木材の明るさと温かみのある校舎は、教育の場として非常に適していると思います。生徒募集に苦勞する時代だからこそ、木造の新校舎は高校の特色として活かせるのではないのでしょうか」と語ります。

在校生が語る、新校舎での毎日

「1組になれてラッキーです！」満面の笑みで話してくれたのは、新校舎に教室がある2年1組の水野さん、松本さん、松原さんの3名。新校舎は主に3年生が使用しており、2年生で2クラスのみ。旧校舎の生徒から羨ましがられることも多いそうで、そんな中で新校舎を使えることに喜びを感じている様子が印象的でした。

「朝ちょっと憂鬱な日でも、校舎に入ると木の香りがしてリラックスできます」「柱が見えていることで、木に支えられている感じがして安心できます」と、木の存在が日常に自然に溶け込んでいることを実感しています。

「3階の吹き抜けは開放感があって気持ちがいいです」「窓際のスペース（腰窓）は友達と話すのにちょうどよく、休み時間によく使っています」と、お気に入りの空間についても積極的に声が上がりました。

新校舎の写真をSNSに投稿すると、他校の友人から「これ、学校なの？」と驚かれることもあるそうです。木の質感や明るい空間は、他校の生徒から見ても魅力的に映っており、生徒たちにとって自慢の校舎になっています。

また、「おしゃれなカフェには木がたくさん使われているので、木造にはもともと“おしゃれ”なイメージがありました」と3人が口をそろえて語ってくれました。木造建築が“新しいもの”ではなく、“親しみやすく、魅力的なもの”として自然に受け止められていることに、次世代の感性が垣間見えました。

今回のインタビューを通じて、木造校舎は単なる建築の選択肢ではなく、教育の質や地域とのつながりを深める可能性を秘めていると感じました。県立春日井高等学校の事例は、これからの学校づくりにおいて「木」が果たす役割を示す、ひとつの答えかもしれません。

（インタビュー日：2025年7月9日）



春日井高等学校

佐野好宏校長（写真中央）

2年1組 水野さん（写真左）

松本さん（写真右）

※松原さんは撮影に参加されていません。



開放感のある
3階教室の吹き抜け



休み時間に人気の
大きな窓と腰枠

設計・施工者が語る、校舎づくりに込めた想い

設計の出発点は「木造校舎から生まれる春日井の“杜”をつくること」でした。

生徒たちが日々、木の温かみに触れながら、安心して学び、交流できる空間づくりを何よりも大切にしました。

明るい教室や開放的な共用部、自然と人が集まる吹き抜けや窓際のスペースなど、日常の学校生活を豊かにする仕掛けを随所に散りばめています。

構造面では、木造と鉄筋コンクリート造を組み合わせた混構造に挑戦し、木造部分の水平力を鉄筋コンクリート造が負担することで十分な強度を確保しました。本計画は日常の快適性や安全性を高めるとともに、非常時には地域の避難所としても活用できる可能性を備えています。

設計・施工チームが一丸となって“杜”をつくりあげました。優しく人々を包み込む校舎のかたちを感じ取っていただきたいです。

設計・施工：春日井高校校舎建築工事共同企業体（JV）

設計担当：熊崎（株式会社松田平田設計）

施工担当：板橋（住友林業株式会社）

木材利用の詳細は122ページへ

